

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2011年8月22日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.54 「希望を持てる面談を」

盆休みも終わり、夏期講習も終盤戦です。北の大地では既に2学期の授業が始まっていることでしょう。2学期最初のイベントとして3者面談を予定している塾が多いと思います。夏休みの最後に実施された模擬試験のデータを基に今後の学習計画についての相談会です。

面談は塾の力量を示し、口コミ・評判を作る絶好の機会です。ところが…多くの塾が大きなミスを犯しています。わざわざ教室まで足を運んでくれた生徒・保護者を憂鬱な気分で帰してしまうのです。何故でしょうか。

生徒・保護者の希望を奪うセリフを言うからです。本人はもちろん、親としては我が子には最後まで希望を持っているものです。

この世を動かす力は希望である。やがて成長して果実が得られるという希望がなければ、農夫は畑に種をまかない。 (魯迅)

有名な一節です。人は希望があつてはじめて行動に移します。ところが、正直なあまり、生徒の希望を奪うセリフを吐いてしまう塾人がいます。

「偏差値が5ポイント落ちた」

「英語は上がったけれど、理社の暗記科目がどうしても克服できていない」

「とても無理だから、志望校を下げよう」

「君はやる気がないから、せつかくの講習も身になっていない」

「本当に家で真面目に勉強しているの?」

「公立は諦めて、私学の推薦ねらいに切り替えることをお勧めします」

生徒の希望を奪えば、生徒は勉強に手を付けなくなります。進学塾には「合格実績がほしいから、無理な学校を不合格覚悟で受けさせる」という批判が付きまとっています。しかし、最後まで生徒の希望を奪わず、最後の最後まで努力を続けさせているのならば、安易に志望校を変更させたり、ましてや「全員合格」の実績欲しさにランクを下げさせている塾よりは遥かに尊い塾だと言えます。

志望校を変更させるのは構いません。しかし、そのことで学

習意欲(希望)まで奪ってしまうのがいけないのです。「今から何しなくても合格する学校」を受験する生徒が、希望に燃えて勉強するでしょうか。

我々塾人の使命は、希望に燃えて努力をする生徒を作り、「結果、不合格だったとしても、その努力は決して無駄にはならないこと」を自覚させ、さらなる努力を促すことです。

有体には言えば、常に希望を与えることです。

人は、人生の希望を失った瞬間に生きる屍となってしまいます。希望無きところに「新たな人生の始まり」はありません。ぜひ、模試の結果に関わらず、希望の持てる面談を心掛けて下さい。教室からの帰り、親子で「これからも頑張ろうね」という会話が聞けるような。

小さなヒントを差し上げます。模試の結果を分析して、1つでいいので「対策教材」を用意してあげて下さい。例えば、社会が苦手な点数が伸びていない生徒に対しては、「重要語句暗記プリント」を用意して言うのです。

「どうしても社会の苦手意識が邪魔をしているようです。そこで、こんなプリントを用意しました。これを1日1枚、1ヶ月取り組んでみませんか。一度、徹底してトライしてみましょう。〇〇君は、自分では暗記が苦手と言っていますが、私はそうは思いません。これから1ヶ月、最大の努力をしてから結論を出しても遅くありません。必ず、成果が出てくると私は信じています。社会さえ伸びれば、志望校合格圏に入りますよ。これから1ヶ月、塾が徹底して応援しますから」

模擬試験のデータを面談の場で初めて見る塾人はいないはずですが。事前に分析して何を話そうかと頭を巡らせることでしよう。そこを一步進めて、対策教材も用意するのです。

その「お土産」を受け取ることで、「面倒見の良い塾だ。ここに通わせてよかった」と保護者は実感します。大変だとは思いますが、トライするだけの価値はあります。

第6回 どこが変わった小学教科書?算数・国語編

夏期講習もいよいよ終盤に差し掛かり、気がつけば秋が訪れます。今年はアブラゼミが少なく、あの声があまり聞こえないのもさびしいなと思う今日この頃です。

さて、今回も本題に入る前に話題を一つ…。

ご存知の方もいるかと思いますが、今年8月～来年1月にかけて、文部科学省国立政策研究所が民間調査会社に委託して「国際成人力調査（PIAAC＝ピアック）」が実施されます。この調査は、OECD が実施する「成人が持っている日常生活や職場で必要とされる技能（成人力）」を測定することを目的とした国際比較調査です。参加予定国は欧米諸国など 26 カ国です。調査対象は 16～65 歳の男女個人 5000 人で、「読解力」「数的思考力」「IT を活用した問題解決能力」および調査対象者の学歴や職歴なども調査されます。この結果は平成 25 年に発表されます。調査対象者の選定基準がよくわかりませんが、調査員が直接来るみたいです…。ぜひご協力をお願いします。

ちなみに例題がすでに発表されています。もしよろしければ一度体験してみてください。なかなか面白い問題がなっています。

【国際成人力調査（PIAAC）の例題】

http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-piaac-reidai.htm

では本題にいきましょう。

今回のテーマは小学算数・国語の二教科について、新指導要領の内容を再確認していきます。すでに新しい教科書を使用している状況ですが、入塾説明会や保護者説明会でも使用できる資料を交えて話をします。

では、まずは算数から。

算数は今回の新指導要領の目玉のうちの一つだけに、保護者も詳しく知りたいところと思います。保護者の中には新しい教科書を見ても、いまいちピンと来ていない方もいるのではないのでしょうか。そういうときは次の資料を活用してください。

【東京書籍】新学習指導要領内容系統表 (605KB)

<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu24/subject/sugaku/pamphlet/sugaku3.pdf>

【啓林館】新学習指導要領内容系統一覧表 (1.33MB)

http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/topics/2011/data/math_keitouhyo.pdf

この資料は教科書会社が発表している「内容系統表」というものです。小学算数から中学数学・高校数学へとどうつながっていくのかを一覧にしたものです。入塾説明会で配布してもいいですし、生徒に見せても大丈夫な資料です。

算数での改訂ポイントは「前倒しとスパイラル」です。以前は中1で学習していた内容を小学生から始めることで、中学の学習内容に高校の学習内容も入るようになります。

計算については、基礎はほぼ小5で終了します。三桁の計算も復活し、少しでも数学的感覚を身につけられるような学習カリキュラムになっています。小6は分数の乗法・除法だけでなく、小5までの復習も入っており、学校の授業の中で復習が取り入れられていることが特徴です。また、小学英語の導入に伴い、文字を用いた式も小

6で学習します。

図形についても、中学からの前倒しが顕著です。点対称と線対称は、以前は中1の最後の単元として位置づけられていましたが、小6に入ってきます。アールやヘクターールといった単位も復活します。今回からリットルは大文字表記の「L」に変わったことも大きな変化のうちの一つです。

関数については、反比例や場合の数が小学生から導入され、中学数学へのつながりをもたせるようにしています。小学生の最大難関単元である割合も小4から始まり（以前は小5）、小5で単位量あたりの計算（以前は小6）をします。少しでも早く学習することで、理解力を高めようというのがねらいです。

次は国語です。

国語も算数と似たような資料があります。

【光村図書】単元系統一覧表 (4.86MB)

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/material/23skyokasho/pdf/kokugo/unit/all.pdf>

【東京書籍】領域別教材一覧 (2.61MB)

<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/subject/kokugo/kokugo-04.pdf>

これは「領域別」もしくは「単元系」一覧表です。各教科書がどの文章を使用しているかが一瞥できるのが特徴です。もちろん配布も可能です。

国語のポイントは「調べ学習と古文」の導入です。小3以降、ほぼどこかに「調べて発表しよう」や「しょうかいしよう」という単元があります。今までは読解力を重視した教科書でしたが、自分で調べて、それをまとめ、発表するというプレゼン能力を育てる教科書になっています。一般社会で通用する人材育成を目標とした『生きる力』の根幹にもつながってきます。

塾の授業で、調べたことを発表するという授業内容を運営するのは難しいと思いますので、塾としては「読解力」「文章力」「文法」といった国語の基礎力を育成していく方向性は変わらないでしょう。特に文法は、小2で主語・述語、小3で指示語・修飾語、小4で修飾関係・接続語、小5で副助詞、小6で補助動詞と学習しますので、きっちりと教えておきたい単元です。

古文については、音読が基本ですが、小6で漢文の書き下し文を音読するレベルまで学習します。小学国語を教える先生は本当に大変になると思いますが、先生のレベルを上げていくことも重要なことになってきます。

学習塾にとって、小学生の算数と国語は生徒募集の軸となってくるので、外部向けの入塾説明会をレベルアップさせるだけでなく、内部向けに先生の質の向上もあわせて行っていくことが急務です。

夏が終われば、次は受験モードです。合格実績は翌年の生徒募集に影響があるので、まだまだ気が抜けない状況ですが、結果はあとからついてくると信じてがんばりましょう!

次回は、「小学理科と社会」の説明をしていきます。では、また。。

■地域一番塾としての「誇り」

東日本の内陸ですでに二十年以上にわたり、地元の教育を底上げするために頑張ってきました。塾を創立した頃はバブル景気のせいか、生徒が面白いように増えましたが、元来の心配性で「いつかは厳しい時代が必ずくる」と日々自分を戒めて、塾の三大経費（人件費・広告宣伝費・地代家賃）を堅実にやりくりする無借金経営を心がけるようになってきました。

そのため、規模的には小さいながらも「地域一番塾」として自他ともに認められる塾になることができたのだと思います。地域社会への貢献は塾としての生徒指導だけでなく、塾に通わない生徒のモラルアップや親業支援などにも力を注いでいます。「この塾に通って良かった」と生涯にわたり生徒も親も思えるような、誰もが納得のいく仕事を「誇り」をもってやりとげたいと思っています。

■後継者としての自覚を持たせるものとは？

安定した経営、ピークの生徒数で会社を継承したら、あとは衰退するだけです。後継者も自信を無くします。ですから、少し失速してもいいから、何か新しい自分が使いやすいシステムを自分の手で構築する・・・そのために若手人材を補強したりピックアップして育成したりする・・・そういう段階がいくつかあってはじめて、「新たなステージの経営」がプロデュースされていくのだと思っています。

某銀行の調査では「自分の代で廃業する理由の約四分の一は適切な後継者がいないから」とされていますが、これは日本の中小企業が家族経営に偏っていて、M&Aより身内の後継者探しを優先しているからだだと思います・・・後継者がいないと廃業してしまうという実に短絡的な選択になっているのです。これでは、社員や講師、そして通塾してくれた生徒やその親たちがあまりにも情けないと思うはずです。

ご他間に漏れず・・・当社も外で数年働いてきた息子に後継を頼みたいと考えていますが、少なくとも、親が拵（こしら）えたものを大事に続けていこうという安易な気持ちであれば、最悪の場合、廃業してもよいとは思っています。後継する人間の自覚を持たせるために、講師から事務員、テナントの校

舎の契約、教材や模試、経理や成績管理のシステムなどを全て見直すように指示しました。あとは自分で考えて変えていけばいいのです。

■無理が通らない塾経営、「債務超過」は駄目

おそらく60歳を目前にして、「次はどうすればいいんだ?」という切迫した気持ちが中小企業の経営者に生まれてくるのだと思います。ここで重要なことは、「債務超過をしていないかどうか?」、ということです。

創設した経営者が高齢であって、債務超過になっていけば、その債務を解消していくのは後継者になります。それを「遣り甲斐のある仕事だ」と言って平気でやれる人は滅多にいません。債務超過になっていなくても、後継者がいないという理由で廃業する経営者も全体の1~5%ほどいるわけですから、せめて後継者に借金だけは残したくないというのが「親心」です。

学生時代から中古車の転売や販売、処理などを手がけてきた経験で、「無理をしなければ、どんなビジネスであっても地獄は見ない」というのが信念でした。都会では一発当たれば大きいかもしれませんが、田舎ではそういうことは皆無と考えて経営しなければいけません。占いも駄目です。自分の力を信じてやりきるしかない・・・そういう覚悟が不可欠なのです。

■意識という能力

塾業界の歴史は浅い。だから、塾経営の自覚を最初から持つことなど、望むこと自体無理があります。できるだけ多くの全国の優良塾を後継者に見学させる二世経営者のセミナーなどもあるようですが、私はもっと具体的なテーマを与えて、現実的な経験を積まないと将来の悲劇は避けられなくなると思います。たとえば、「顧客満足度を半年で倍にする」とか「通塾生の親以外の塾支援者を2ヶ月で100人増やす」とか・・・そうしないと、曖昧な感覚のまま「なんとなく経営」することになります。これはとても恐ろしいことです。

「こうすればこうなる」という明確な意識を持って経営する訓練をさせるべきなのです。



嘘をつかなければいいという問題ではない

フィクションとノンフィクションの境が無くなってしまったのでしょうか？ 彼（某テレビ局プロデューサー）にとって、SNSは本当の自分でいられる唯一の場所であるはずなのに、いつしか虚飾が入り混じった、サイボーグのような「もう一人の自分」に戻っていたのです。

数ヶ月前、彼は知り合いだった著名人同士の不倫関係をまるで「独白」か「日常の雑談」のようにブログで公表してしまったのです。インシャルトークだったとはいえ、勤の良い読者は、それまでのブログでの経緯から、本人たちを割り出すのにそれほど時間はかかりませんでした。

彼自身もかつてタレントの女性マネージャーとの不倫が原因で妻と別居するという苦い過去を持っているのですが、その時と同じように彼のブログは「大混乱」に陥ってしまったのです。

彼は新たなSNSで「私は一切嘘をついていない」「正しいことを言っているのになぜ非難されなければならないのか」と逆切れしていましたが、本当のことばかり言われたら人間怒らない人はいないのではないのでしょうか？ 人間関係において全てが法的に正しいか正しくないかなど、誰も付き合いのスタンダードとは思っていないはずです。

なりすました記者と匿名投稿に怯える日々

新たなSNS上では、「ほとぼり」もそろそろ冷めてきたせいか、日々無難なやりとりが続いてきましたが、実はスポーツ紙や芸能タブロイド紙の記者やスター的な著名人いじめマニアたちが、こっそり友達として入り込んでいたのです。彼らは必ず丁寧語を使い、ファンのふりをして相手を礼賛しつつ本音を聞き出そうとしたり、相手の弱みや秘密に迫ろうとしたりします。

ただし、自分自身がもう一つのアカウントで味方になったり、雇った助手を味方として紛れこませたりもしているので、SNS上は意味不明の会話の応酬が乱れ飛ぶこともあります。彼の「怯え」がその複雑な様相を形成してしまったのです。

そしてまた新たな展開・・・なりすました「作業員」の正

体がなぜかバレて、SNS上で彼は「弾劾文」を発表し、自分が犠牲者であり、正しいことをしていると宣言しましたが、味方であるはずの彼の「知り合いたち」は、困惑して一向に反応してこなかったのです。

他人の批判で自分が正義にはならない

彼とは別に、沢山の本を出し、批評家というよりは批判家として似非知識人の若者たちにカリスマ的な存在となっている某氏は、よそ者が一人でも入ってきて場違いな意見が出ると、戦国武将よろしく「無能な」若者たちを煽って、よそ者を排除してしまうのです。まるで大勢で他人の批判をすれば正義であるかの如く・・・定期的にそのような勢いが現れるのです。

しかし、彼をよく知る同類の人たちは彼に近づこうとはしません。実力的には平均以上であっても、周囲の人を自分のペースに乗せなければ気が済まない彼の自己顕示欲がそうさせるのかもしれませんが。

SNS上では、たとえどれほどの著名人であっても大きい会社の重役であったとしても、「一個の人間」としての付き合いが重視されるべきです。だからこそ面白いのです。仮面をかぶって騙したり、匿名で暴言を平気で吐いたりするウィルスのような人たちがうようよしていたら、気楽に情報交換することはできなくなります。

情報化社会において、諸外国よりもガードが甘いと言われる日本・・・たしかに昔日本人は大人しい人ばかりだったかもしれませんが、最近はそうでもないので気をつけなければいけません。また、自分自身のガードも甘くならないように緊張していないと何が起るか予測不能な時代でもあるのです。